

## 141 No. 3: 外国ルーツの子どもへー日本語教育など支援重要ー (令和元年5月28日)

世界中でどれくらいの方が日本語を学んでいるかご存知だろうか。

国際交流基金の調査(2015年度)によると、137カ国・地域で365万5024人が日本語を学んでいる。国別では、中国(95万3283人)、インドネシア(74万5125人)が上位を占める。

中国やインドネシアなど多くの国・地域では、中等・高等教育機関において日本語教育を行っている。

一方、香港では、日本語学習者の7割が民間の学校で学ぶ。自習者・独習者も少なくない。学習の動機として「漫画、アニメ、J-POP、ファッション等への興味」と答えた人が他の国・地域に比べ圧倒的に多い。幼少期から日本のポップカルチャーに愛着を持ち、日本語を学び始める子どもが多いようだ。

こうした中、今年5日、香港日本語教育研究会主催による「香港小中高生日本語スピーチコンテスト」が、学校関係者や教育・文化関係者、報道機関など100人以上を集め、香港城市大学において開催された。

コンテストは、詩の暗唱、朗読劇、スピーチの部に分かれ、小学生10人と中学生8人(詩の暗唱)、中学生5チーム(朗読劇)、高校生7人(スピーチの部)により争われた。

当事務所は2年前から協賛団体としてコンテストの開催を支援しており、今年も感慨深い内容だった。わずか6歳にして流ちょうな日本語で詩を朗読する小学生、緊張のため実力を発揮できず悔しがる中学生、小道具を用意し表現力豊かに演じた中学生チームなどが登場した。中でも自身のアイデンティティーについて語った高校生のスピーチには、同世代の若者たちも感じるものがあったようだ。

その高校生は、パキスタンにルーツを持っている。香港で生まれ育ったが、顔立ちや宗教の違いから疎外感やアイデンティティーの揺れに苦しんでいたという。そんな彼女が日本語を学び、一人の日本人大学生との交流を通じ、「何人か」と単一にアイデンティファイする必要はなく、「私は地球人なんだ」と気づいたというスピーチ内容だった。日本では出入国管理法改正により、今後、外国人労働者の受け入れが拡大するだろう。それに伴い、外国にルーツを持つ子どもたちに対する支援が課題となってくる。特に彼らに対する日本語教育と、彼らのアイデンティティーの多様性を認める社会を創ることが極めて重要である。

外国にルーツを持つ子どもたちは、いつか帰国するお客様ではなく、共に地域や社会を作り上げる仲間であり、栃木と海外とをつなぐ貴重な宝なのだから。



【スピーチコンテストの様子】

毛塚 隆弘(けづか たかひろ)

栃木県香港事務所所長。

1993年県庁入庁。産業政策課、国際課などを経て日本貿易振興機構(ジェトロ)に出向。2017年4月から現職。栃木市出身。